

第9章

東アジア諸国・地域および米国の競争力分析

－ 輸出 RCA、輸入 RCA、総合 RCA による分析 －

梶原弘和

はじめに

本研究の最終分析目標は、数量指数と価格指数が競争力の指数である顕示的比較優位指数（RCA: Revealed Comparative Advantage）といかなる関係をもって変化し、これが対象国（日本、アメリカ、NIES、ASEAN-4、中国）においていかなる特長を有しているかにある。しかし今年度は統計が完成していないので、RCA 分析のみに限定せざるを得なかった。対象とした RCA 分析は通常の輸出競争力を示す RCA だけでなく、輸入 RCA、および輸出 RCA から輸入 RCA を差し引いた総合 RCA を計測し、RCA 分析を深化させ、多面的な分析を試みた。

1. RCA 分析

RCA 分析は輸出競争力を示す 1 つの指標として使用されている^(注1)。計測方法は対象国の特定品目の総輸出に占めるシェアを同品目の世界総輸出に占めるシェアで除した値が RCA 指数となる。特定品目の対象国における輸出シェアと世界全体の輸出シェアを比較し、輸出シェアの大小が競争力を反映していると考ええる。つまり特定品目の対象国における輸出シェアが世界平均シェアを上回っているならば指数は 1 以上になり、比較優位品目とみなす。逆に下回っているならば指数は 1 以下になり、比較劣位品目とみなす。

今年度は比較劣位を示す輸入からみた RCA 指数を計測した。比較劣位指

数である輸入 RCA は特定品目の当該国における輸入シェアを世界総輸入シェアで除し、同指数が 1 以上ならば比較劣位品目とみなす。また輸出 RCA から輸入 RCA を差し引いた総合比較優位指数（総合 RCA）を計測した。

RCA は特定品目、たとえば SITC（標準国際貿易商品分類）の 5～6 桁分類で計測し、単品ごとの競争力を考えるのであるが、計測に時間がかかり、短期的に変化しやすく、長期の分析は難しい。また価格や数量と関係づける分析でも同様のことがいえる。したがって今回の分析は実験的に SITC1 桁レベルで 3 つの指数を 1970～2001 年間の長期間を対象に計測し、指数の変化、指数間の関係に焦点を当てて分析した。

以下 SITC 0 類から SITC8 類までの計測結果に基づき分析する。なお、紙面の都合から SITC1 類から 4 類の図は省略する。

2. 一次産品（SITC 0 類～4 類）の RCA

SITC0 類（食料品及び動物）に関して中国は 1990 年代前半まで輸出 RCA は 1 を上回っていたがその後 1 を下回り、1 の近傍で推移している。輸入 RCA は 1 を下回り、その結果総合 RCA は 1 を下回り、近年は 0.4 程度である。したがって中国の 0 類の競争力は低下傾向にあるといえよう。日本の輸出 RCA はゼロの近傍にあり、輸入 RCA は 1 を上回り、近年は 2 の水準に達している。総合 RCA は一貫してマイナスであり、-2 に達しつつある。香港も日本と同様に総合 RCA が一貫してマイナスであるが、輸入 RCA が低下し、総合 RCA がマイナスであるが上昇傾向を示している。台湾は輸出 RCA が 1970 年代に 1 を上回り比較優位であったが、1980 年代以降低下して近年は 0.2～0.3 の近傍で推移している。輸入 RCA は当初から 1 を下回り、近年でも 0.5 の水準にある。輸出 RCA が低下したことを反映して総合 RCA は 1980 年代以降ほぼマイナスとなっている。韓国の輸出 RCA はほぼ一貫して 1 を下回り、輸入 RCA も同様であるが 1980 年代後半以降輸入 RCA が輸出 RCA を上回り、結果として総合 RCA はマイナス値を拡大している。逆にマレーシアは 1 を上回っていた輸入 RCA が低下し、輸出 RCA は一貫して 0.5 の近傍にあり、総合 RCA は輸入 RCA の低下からマイナス値を縮小している。シンガポールは輸出 RCA、輸入 RCA とともに 1 を下回り、両者がゆっくり低下し、

こうした動きから総合 RCA はマイナスであるが一貫して 0.2 の近傍を推移している。インドネシアは 1970 年代前半に輸出 RCA が 1 を上回り、1970 年代後半から 1980 年代前半に輸入 RCA が 1 を上回り、1980 年代後半から 1990 年代前半に再度輸出 RCA が 1 を上回り、近年は輸入 RCA が 1 を上回るという一貫した変化を示していない。この結果、総合 RCA もプラス 0.5 からマイナス 0.5 の間を上下変化している。フィリピンの輸出 RCA は 1980 年代まで 2 を上回っていたが、これ以降低下して 1990 年代後半以降は 1 を下回る水準になった。輸入 RCA は 1 の近傍を上下変化しているが、近年は 1 を上回った。輸出と輸入のこうした変化から総合 RCA は 1990 年代後半以降ついにマイナスになった。タイの輸出 RCA は一貫して 1 を上回り、1980 年代の 5~6 の水準からは低下したが、近年でも 3 の水準にある。輸入 RCA は常に 1 以下であり、この結果総合 RCA は輸出 RCA とほぼ同じ変化を示している。米国の輸出 RCA は高くないがほぼ 1 を上回り、輸入 RCA が緩やかな低下傾向であったことから総合 RCA は 1 を下回っているが一貫してプラスを維持している。このように 0 類に関して総合 RCA が 1 を上回り比較優位をもつ国はタイのみであり、中国とアメリカはプラスであるが 1 を下回り、他はすべてマイナスとなっている（図 1）。

SITC1 類（飲料及びタバコ）で輸出 RCA が 1 以下、輸入 RCA が 1 以上、総合 RCA が 1 以下で明確な比較劣位を示している国は、日本だけである。日本に近いのが香港と台湾であり、総合 RCA は一貫してマイナスである。しかし香港は輸出 RCA が一時的に 1 を上回る期間がある。韓国 1970 年代前半に輸出 RCA、総合 RCA が 1 を上回っていたが、その後低下し、1 に達していないが輸入 RCA が輸出 RCA を上回り、1980 年代後半以降総合 RCA はマイナスとなっている。インドネシアもほぼ韓国と同様の変化を示し、総合 RCA は 1990 年代以降マイナスになっている。マレーシアは輸入 RCA が 1 を上回る水準から低下し、一方で輸出 RCA が 1 に達していないが上昇し、1990 年代後半以降プラスになった。中国はすべての指数が 0 から 1 の間を上下変化し、一貫した推移を示していない。他は輸出 RCA と輸入 RCA が同方向に変化し、1990 年代後半に総合 RCA が 1 以下であるがプラスなのは米国のみである。

SITC2 類（食用に適しない原材料：鉱物性燃料を除く）は日本、台湾、韓

国では輸入 RCA が 1 以上、輸出 RCA が 1 以下、総合 RCA が 1 以下（あるいはマイナス）の明確な比較劣位を示している。中国も 1990 年代以降は同様の状況である。マレーシア、インドネシア、フィリピン、タイは 1980 年代後半から 1990 年代前半まで輸出 RCA、総合 RCA とともに 1 をはるかに上回る水準である比較優位を示していたが、輸出 RCA が急速に低下し、総合 RCA は 1990 年代後半に 0 ないしマイナスに低下した。ASEAN-4 の中心的な輸出品であった同財の高い輸出シェアが工業品輸出増加から急速に低下したことを反映している。1980 年代までシンガポールを経由して輸出していたことからシンガポールもほぼ同様の推移を示している。香港はすべて 1 以下であるが輸出 RCA が上昇して輸入 RCA とほぼ同水準になり、1980 年代以降総合 RCA は 0 の近傍で推移している。米国の輸出 RCA は一貫して 1 を上回っているが、輸入 RCA も 0.6 の近傍で推移し、総合 RCA は 1 を上回る時期が多い比較優位傾向にある。

SITC3 類（鉱物性燃料）の最大シェアを有するのは原油であり、対象国で原油輸出国はマレーシア、インドネシア、1980 年代の中国であることから、指数の動きは全体的にはっきりしている。日本、台湾、韓国、フィリピン、タイ、米国は輸入 RCA が 1 を上回り、輸出 RCA は 0 の近傍、総合 RCA はマイナスで明確に比較劣位を示している。マレーシア、インドネシアは上下変化するが輸出 RCA、総合 RCA とともに 1 をはるかに上回る。輸入 RCA は近年インドネシアが高くなってはいるが比較優位の状態にある。中国も 1980 年代に同じ状況であったが原油輸入国になったことから比較劣位になり、総合 RCA はマイナスになった。香港は輸入 RCA が 1 を上回っていないが輸出 RCA よりも高く、総合 RCA は一貫してマイナスであることから比較劣位に間違いない。シンガポールは原油精製品を輸出していることから輸出 RCA はほぼ一貫して 1 を上回り、原油輸入から輸入 RCA も 1 を上回って、総合 RCA は 1 を上回る時期もあるが近年は 0 の近傍にある。製品の比較優位、原料の比較劣位が並存している。

SITC 4 類（動物性または植物性の油脂）は、日本、中国、香港、台湾、韓国で総合 RCA がマイナス、輸出 RCA は 1 以下である。輸入 RCA は輸出 RCA を上回っているが、1 以上ではない。比較劣位に違いないが、輸入シェアが大きくないことから輸入 RCA は大きな値になっていない。マレーシアは輸

出 RCA、総合 RCA は 10 を上回る水準で推移し、輸入 RCA は極端に低い、一貫して比較優位の状態にある。インドネシアは 1980 年代前半に低下するが、その後上昇し、近年は輸出 RCA、総合 RCA とともに 10 の近傍にあり、輸入 RCA は 1 以下の比較優位の状況にある。フィリピンも比較優位であるが、輸出 RCA、総合 RCA はかつての 20 を上回る水準から 5 の近傍に低下した。輸入 RCA は一貫して低位にある。タイは比較優位ではないが、近年輸出 RCA が 1 を上回り、輸入 RCA も 1 の近傍にあるが、総合 RCA はプラスとなった。シンガポールは 1990 年代前半まで輸出 RCA、輸入 RCA とともに 1 を上回り、その後ともに 1 を下回り、総合 RCA はかつての 1 の近傍 0 へと低下した。シンガポールを経由した輸出入が輸出と輸入の RCA を同水準に推移させていると考えられる。米国の輸入 RCA は 0.4~0.6 で推移しているが輸出 RCA が 1990 年代以降 1 を下回り、総合 RCA も 0.2~0.3 の水準に低下し、競争力を失っていることが示されている。

以上のように一次産品に関しては日本、NIES では競争力がなく、中国、米国でも傾向的には競争力を失っている。ASEAN-4 は依然として競争力のあるものがあるが、かつてのような圧倒的な比較優位ではなく、工業品輸出シェアの増加から比較優位指数は低下していることが示されている。

3. 工業製品（SITC5 類~8 類）の RCA

SITC5 類（化学工業品）は米国だけが輸出 RCA が一貫して 1 を上回っている。米国は輸入 RCA も 0.5~0.6 の近傍にあることから総合 RCA は 1 を下回り、近年は 0.4 程度である。日本とシンガポールは一時的に輸出 RCA が輸入 RCA を上回り、総合 RCA がプラスになる時期を経験している。他は輸入 RCA が 1 を上回り、総合 RCA がマイナスの時期が続いている。しかし傾向的に輸出 RCA が上昇傾向にあることから、総合 RCA も 0 の近傍へ向かっている（図 2）。

SITC6 類（原料別製品）は 1980 年代前半まで日本に比較優位があり、輸出 RCA、総合 RCA とともに 1 を上回り、輸入 RCA は 0.5 の近傍で推移していた。しかしこれ以降輸出 RCA は 1 を下回る一方、輸入 RCA が上昇し、総合 RCA は 0 の近傍にある。しかし輸出 RCA が輸入 RCA から大きく乖離して低下す

るのではなく、ほぼ均衡しており、依然として輸出力のある商品が存在していることを示している。日本に代わって競争力を得てきたのが台湾、韓国である。両国は輸出 RCA が一貫して 1 を上回り、1 の近傍にあるがこれを下回り、総合 RCA は 0.5~0.6 の水準を維持している。輸入 RCA が高く、総合 RCA が低いことは日本と同様に競争力のある商品、ない商品が混在していることを反映している。韓国、台湾に次いで SITC6 類の輸出 RCA が強化されているのは中国、インドネシア、タイである。インドネシアと中国の輸出 RCA は 1980 年代後半以降 1 を上回り、タイも 1 の近傍にある。ただし中国とタイは輸入 RCA が輸出 RCA を上回り、総合 RCA は依然マイナスであることから、韓国や台湾のような圧倒的な競争力を有しているわけではない。インドネシアの輸入 RCA も高いが、輸出 RCA が輸入 RCA よりも高く、総合 RCA はプラスであることから韓国、台湾に次ぐ競争力を有しているといえるだろう。香港はタイや中国と同様に輸出 RCA は 1 を上回っているが、輸入 RCA が輸出 RCA を上回り、総合 RCA がマイナスという状況である。マレーシア、シンガポール、フィリピン、米国は輸入 RCA が 1 を上回るか、1 の近傍にあり、輸出 RCA がこれを下回っていることから総合 RCA はマイナスである(図3)。

SITC7 類(機械及び輸送用機器)は先進国型産業であるが、東アジアは電気・電子機械の世界的な生産・輸出拠点となってきたことから 1980 年代後半以降急速な競争力変化が生じている。この産業分野で世界的な競争力を有している日本の輸出 RCA は 1980 年代の 2 を上回る水準からは低下しているが、近年でも 1.5 の水準にある。輸入 RCA は 1980 年代後半以降徐々に上昇し 0.5 を上回る水準に達した。これにより総合 RCA は 1 を下回ることになった。この変化は近隣アジア諸国への生産拠点の展開に伴う分業の拡大から輸入が増加していることを反映している。機械産業は先進国型産業であるとともに、世界的な分業が進展している産業でもある。日本の機械産業も欧米先進国と同様に近隣諸国との分業が拡大してきたことを示している。このことは米国の競争力変化に現れている。米国の輸出 RCA は一貫して 1 を上回り、一方で輸入 RCA もほぼ 1 を上回る水準で推移し、総合 RCA は 0 の近傍にある。比較優位財と比較劣位財の混在というよりも、多くの種類、多くの部品からなる機械産業では製品、部品の輸出入依存が高く、分業の進展がこうした変化となっていると考えられる。同様のことは東アジア全体にもあ

てはまる。輸出 RCA、輸入 RCA とともに 1 以上ないし 1 の近傍にある。ただし韓国、台湾、シンガポール、フィリピンは輸出 RCA が輸入 RCA を上回り、総合 RCA はプラスとなっているのが一つの違いである。とはいえ総合 RCA のプラス値も 0.5 以下であり、SITC6 類でみられるような競争力の急速な強化過程を示していない。東アジアにおける分業の拡大を反映した変化である（図 4）。

SITC8 類（雑製品）は SITC6 類以上に東アジアの競争力が強化された分野である。逆に日本は 6 類と同様に競争力を低下させた分野である。1970 年代前半に日本の輸出 RCA は 1.5 を上回っていたがこれ以降低下し、近年は 0.5 の近傍にある。これに対して輸入 RCA はほぼ 1 の水準にあり、総合 RCA は 1980 年代後半以降マイナスが続いている。しかし 6 類と同様に輸出 RCA と輸入 RCA は一定の水準に保たれており、依然として競争力のある財が残っていることを示している。日本の競争力を奪ってきた香港、韓国、台湾も近年その競争力の水準が低下している。香港の輸出 RCA は 1970 年代に 7 を上回る高水準にあったが、次第に低下して近年は 2~3 にある。これに対して輸入 RCA は 1 から 2 に上昇し、総合 RCA も 6 から 1 の近傍に低下した。香港は現在でも競争力を有しているが、台湾、韓国は競争力を失いつつある。台湾の輸出 RCA は 1970 年代に 5 の水準にあったが 1990 年代後半以降に 1 を下回った。また総合 RCA も同様に 4 の水準から 0 の近傍に低下し、逆に輸入 RCA は 1 の近傍へと徐々に上昇している。韓国もほぼ同様の推移であり、輸出 RCA は 1990 年代後半に 1 以下となり、総合 RCA は 0 の近傍、輸入 RCA は輸出 RCA と同水準にある。NIES から競争力を奪ってきたのが中国と ASEAN-4 である。中国の輸出 RCA は近年 2 を上回り、総合 RCA も 1.5 の水準にある。また輸入 RCA は 0.5 の水準にあり、急速に競争力を付けてきたことを示している。ASEAN-4 の近年の指数は輸出 RCA ではタイ、インドネシアで 1 を上回り、両国の総合 RCA も 1 の近傍にある。マレーシア、フィリピンの輸出 RCA は 1 を上回ってはいないが、1 の近傍にあり、輸出 RCA が輸入 RCA を上回っていることから総合 RCA はフィリピンで 0.5、マレーシアで 0.2 のプラス値を示している。ASEAN-4 も中国ほどではないが競争力を急速に強化している。シンガポールは輸出 RCA と輸入 RCA が 0.6~0.8 の間で均衡し、ゆえに総合 RCA も 0 の近傍にある。米国は輸出 RCA が 1 の近傍

にある一方、輸入 RCA がこれを上回り、総合 RCA は一貫してマイナスである（図 5）。

以上のように日本や米国の先進国が機械産業への集中という変化を示す一方、NIES もまた先進国型へと進みつつある。かつて日本や NIES が競争力を有していた SITC6 類や 8 類の競争力を奪ってきたのが中国と ASEAN-4 であった。また東アジアは分業が進展し、機械産業の輸出 RCA と輸入 RCA が共に上昇するという変化を示している。

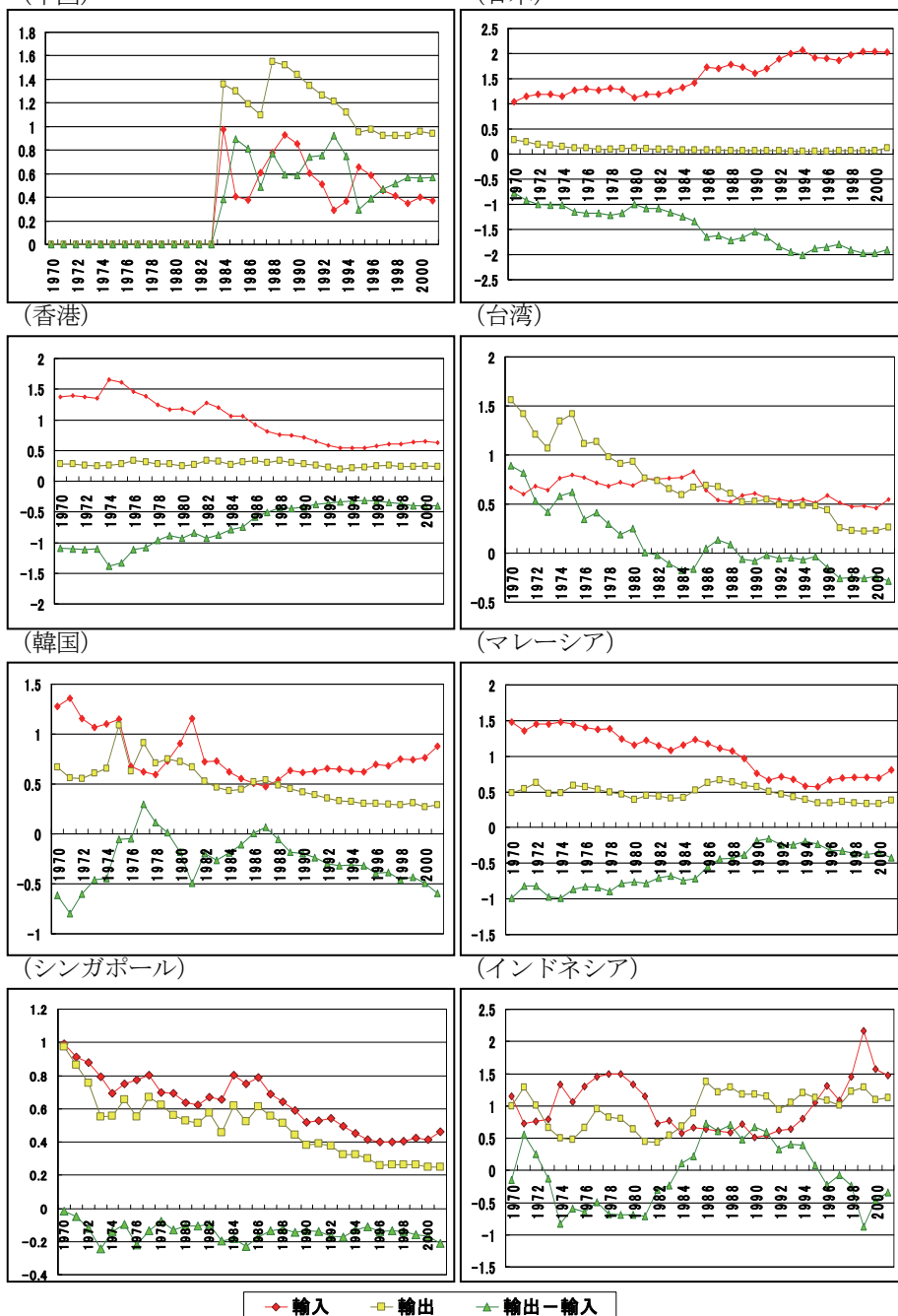
おわりに

一次産品のように資源の有無が反映される場合、RCA の変化は明らかである。輸出力のある国は輸出 RCA が 1 以上、輸入 RCA は 1 以下、総合 RCA は 1 ないしプラスとなる。しかし資源がなくても加工品、たとえば水産物、農産物、鉱物資源を加工する産業に競争力を有する場合、輸出 RCA、輸入 RCA がともに高くなる。あるいは輸出 RCA を高め、輸入 RCA を低める効果を有することから、両指数ともに 1 以下になる場合がある。当分析で一次産品の RCA が一貫して変化しておらず、変化の推移が読みにくいのはこうした要因が含まれているからである。工業品に関しても多少とも同様の傾向があり、SITC1 桁分類では分類が大きすぎるから、2 桁ないし昨年度のような産業連関分析に合わせた産業分類に多少とも拡大する必要がある。

最後に RCA を計測する際、世界をすべて網羅するように努めているが、統計上難しい。今回使った世界合計は全貿易の 95～96%を包含している^(注2)。ところで対象国の RCA を貿易額の大きな世界 33 カ国を世界合計として計測した場合、付表（日本、中国、韓国の SITC6 類、7 類、8 類）のようにまったく同じ図になっている。もちろん数字は少数点 5 桁で計測しているので、33 カ国の場合多少数字が大きくなるが、ほとんど誤差の範囲であることが明らかとなった。

以上の分析を基礎に、最終的には RCA 分類の拡大と価格指数、数量指数との関係をさらに分析する予定である。

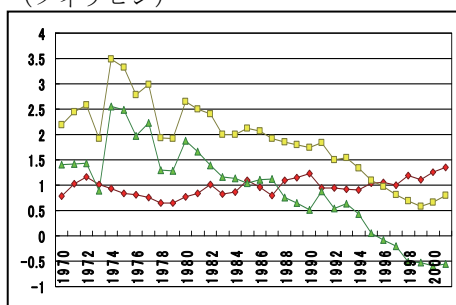
図1 東アジア諸国・地域および米国における SITC0 の RCA
(中国) (日本)



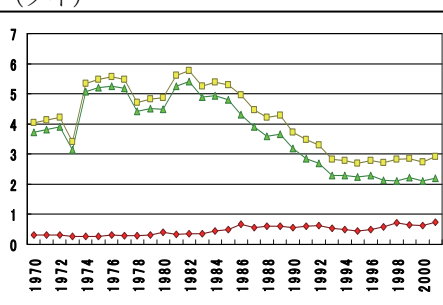
(出所) AID-XT 基礎データにもとづき編者の野田作成。

(図 1 の続き)

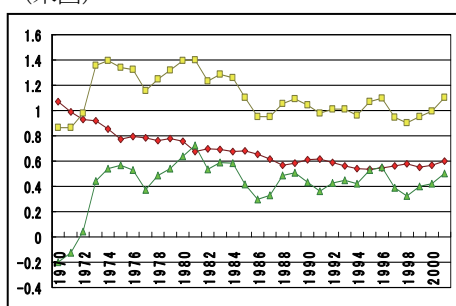
(フィリピン)



(タイ)



(米国)



(その他)

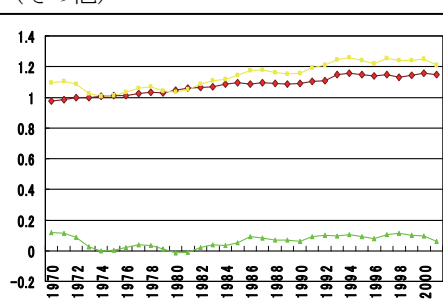
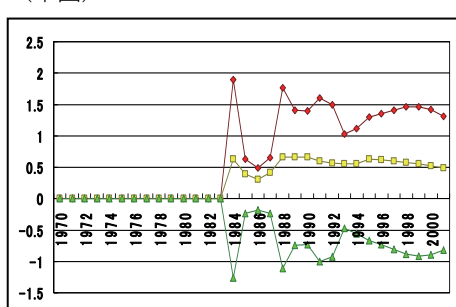
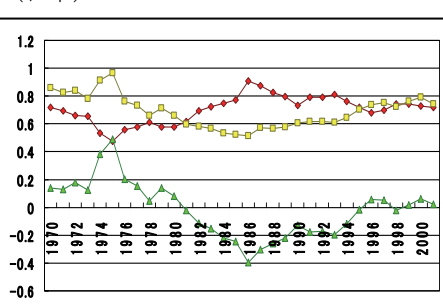


図 2 東アジア諸国・地域および米国における SITC5 の RCA

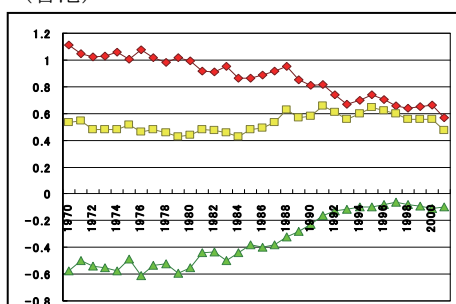
(中国)



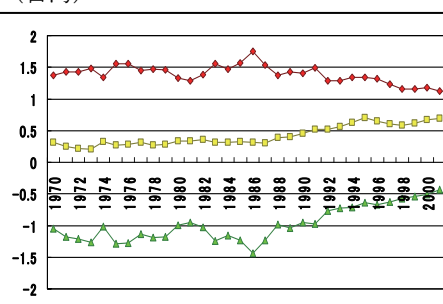
(日本)



(香港)



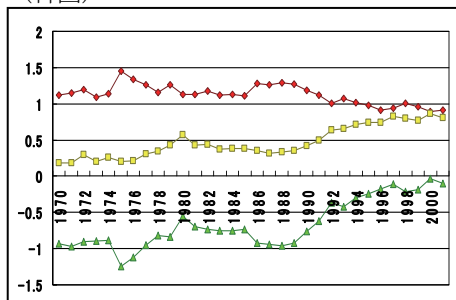
(台湾)



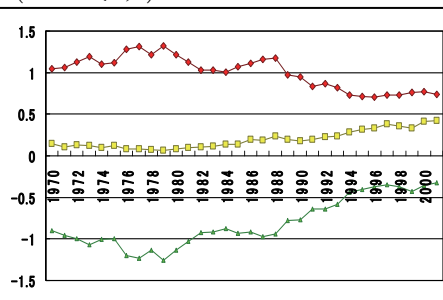
◆ 輸入 □ 輸出 ▲ 輸出－輸入

(出所) 図 1、2 ともに AID-XT 基礎データにもとづき編者の野田作成。

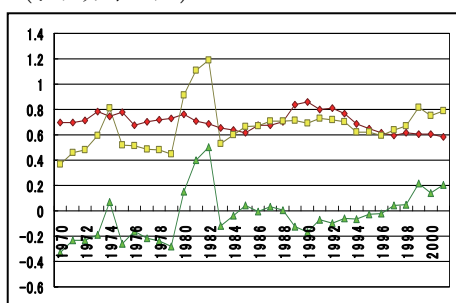
(図 2 の続き)
(韓国)



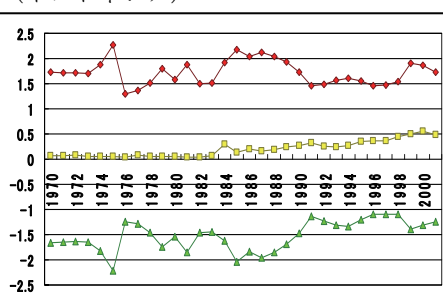
(マレーシア)



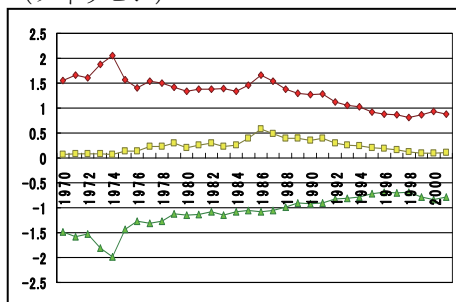
(シンガポール)



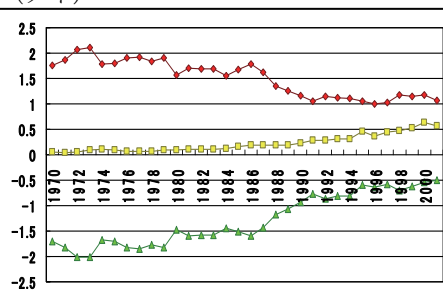
(インドネシア)



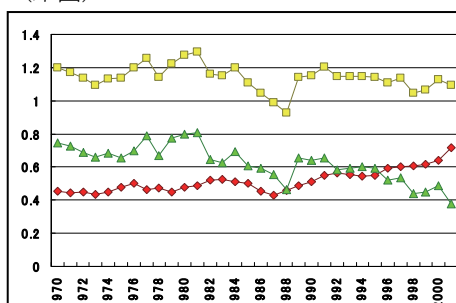
(フィリピン)



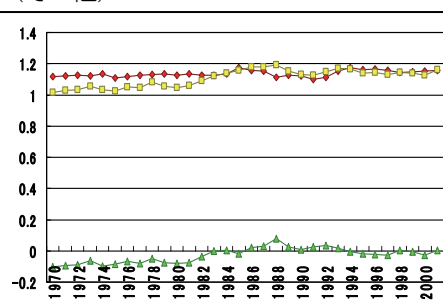
(タイ)



(米国)



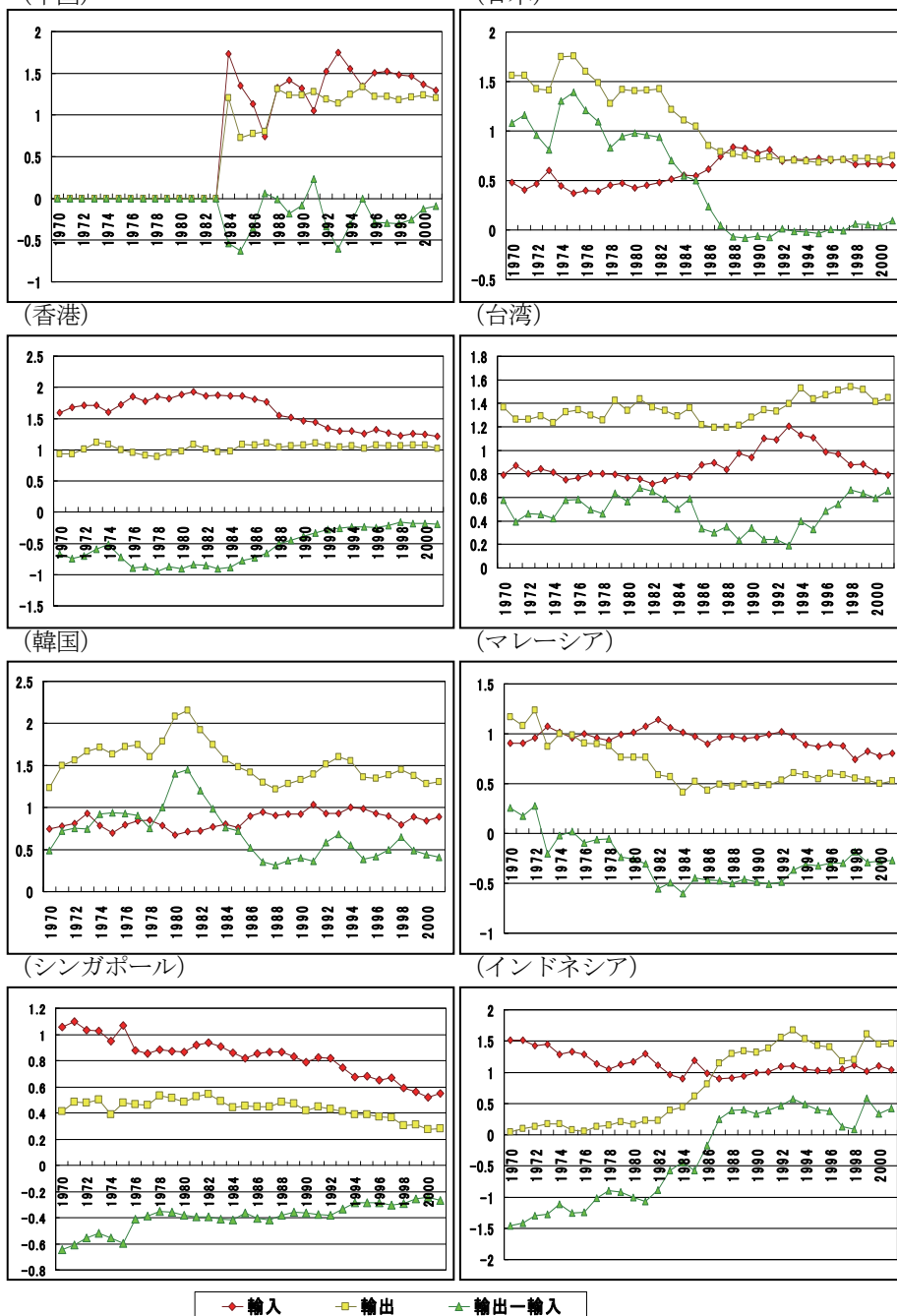
(その他)



◆ 輸入 □ 輸出 ▲ 輸出－輸入

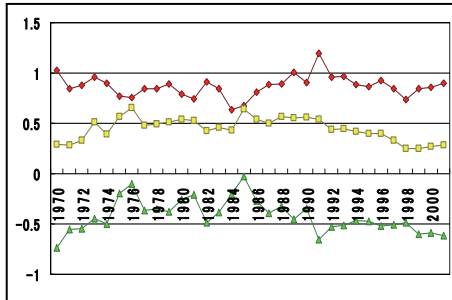
(出所) AID-XT 基礎データにもとづき編者の野田作成。

図3 東アジア諸国・地域および米国における SITC6 の RCA
(中国) (日本)

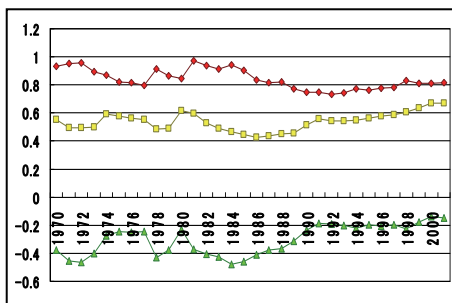


(出所) AID-XT 基礎データにもとづき編者の野田作成。

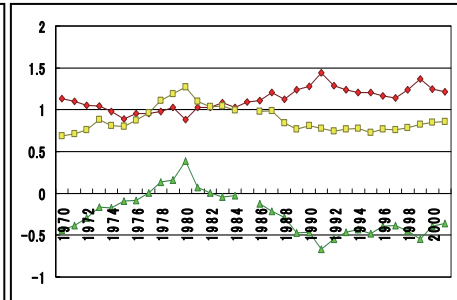
(図3の続き)
(フィリピン)



(米国)



(タイ)



(その他)

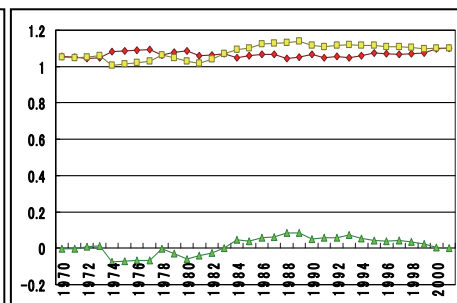
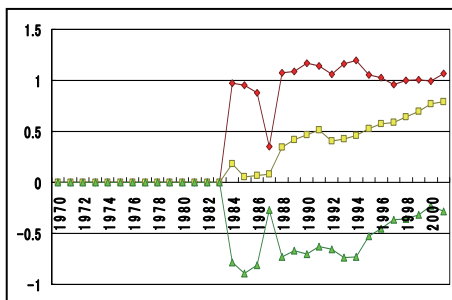
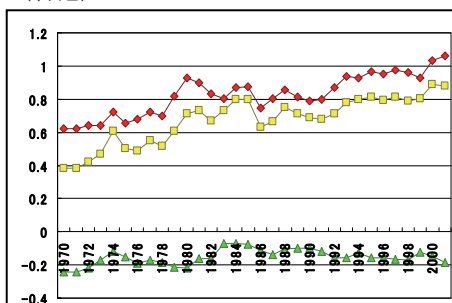


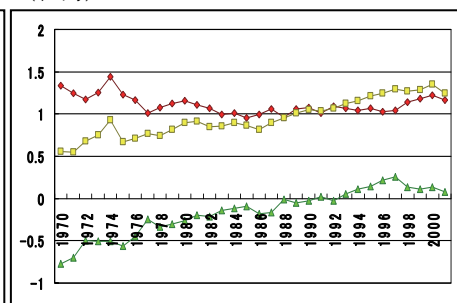
図4 東アジア諸国・地域および米国における SITC7 の RCA
(中国) (日本)



(香港)



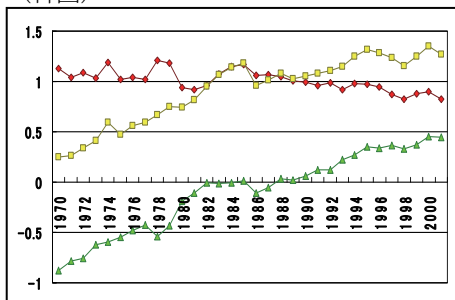
(台湾)



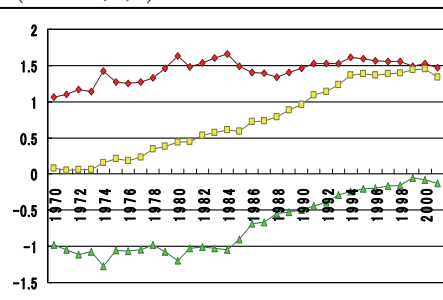
◆ 輸入 □ 輸出 ▲ 輸出-輸入

(出所) 図3、4 ともに AID-XT 基礎データにもとづき編者の野田作成。

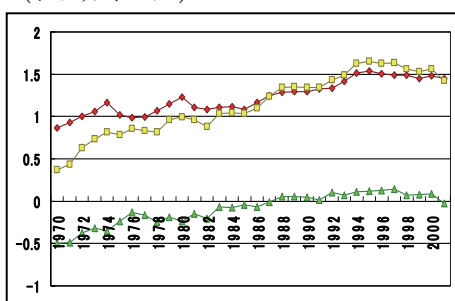
(図 4 の続き)
(韓国)



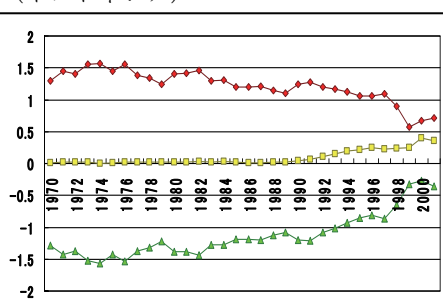
(マレーシア)



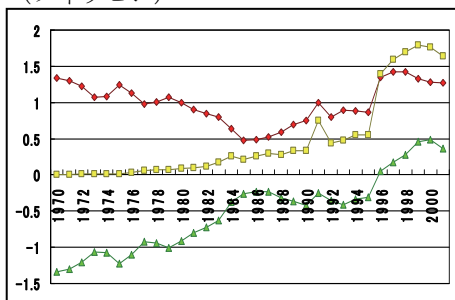
(シンガポール)



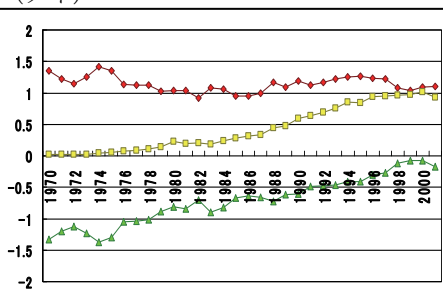
(インドネシア)



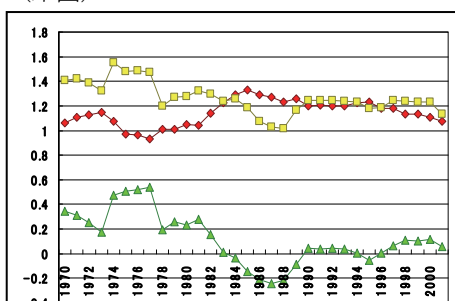
(フィリピン)



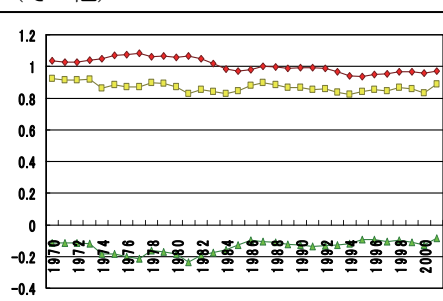
(タイ)



(米国)



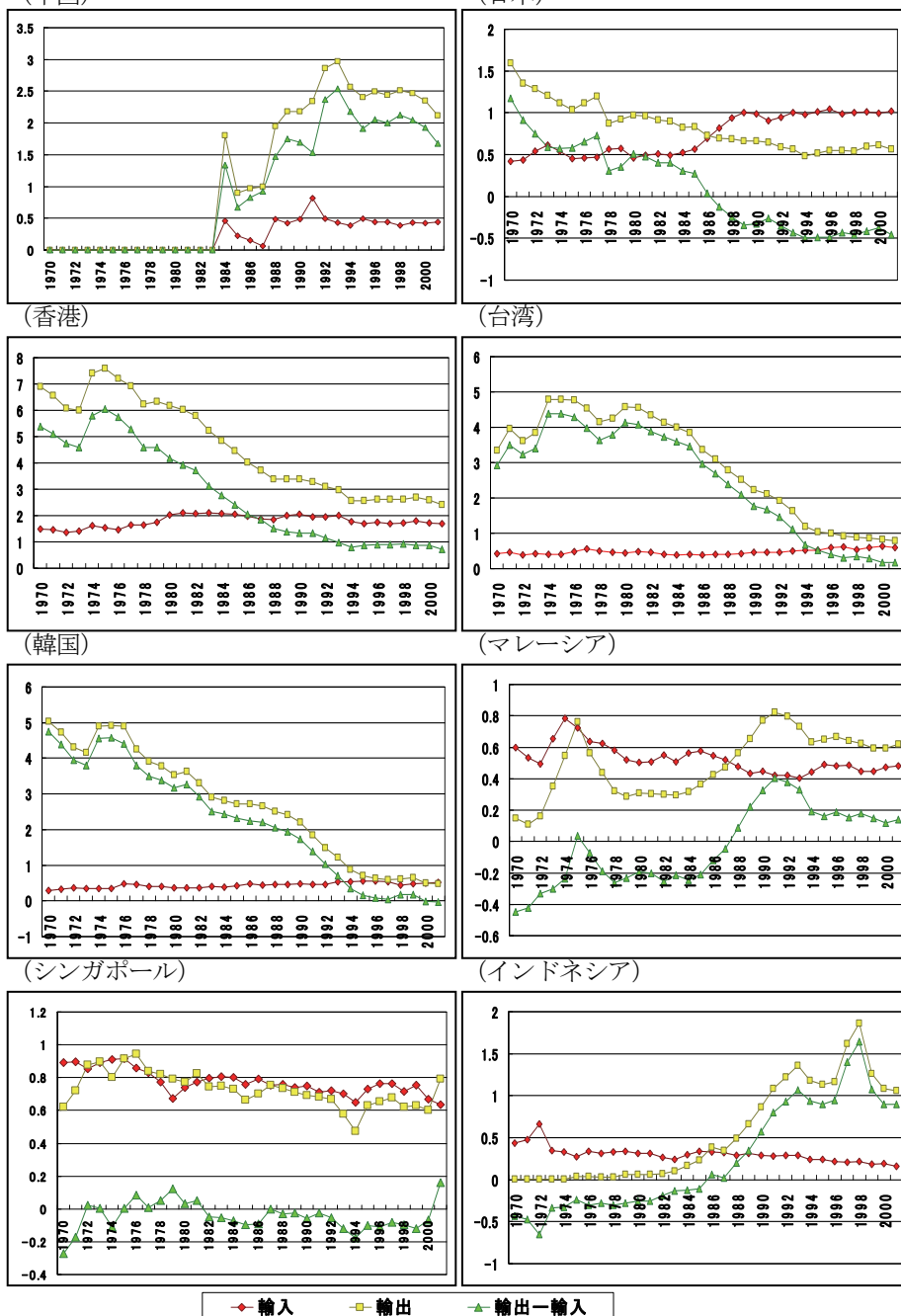
(その他)



● 輸入 ■ 輸出 ▲ 輸出－輸入

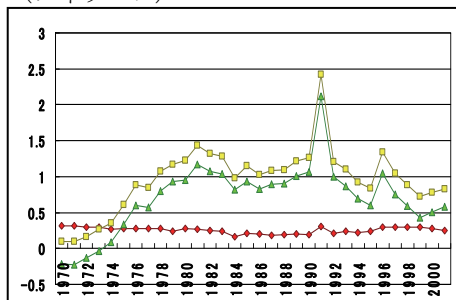
(出所) AID-XT 基礎データにもとづき編者の野田作成。

図5 東アジア諸国・地域および米国における SITC8 の RCA
(中国) (日本)

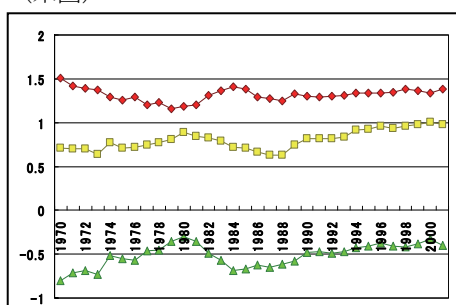


(出所) AID-XT 基礎データにもとづき編者の野田作成。

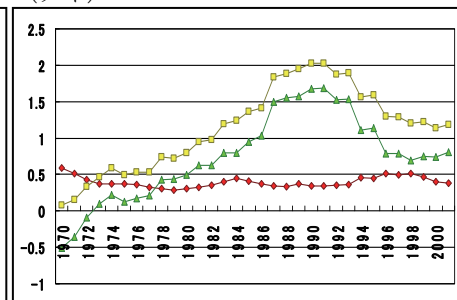
(図 5 の続き)
(フィリピン)



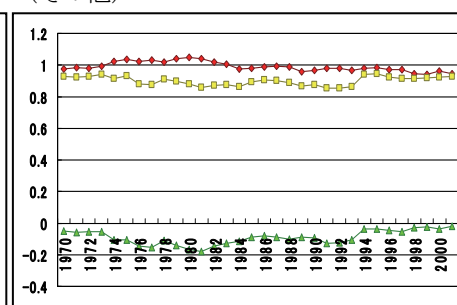
(米国)



(タイ)



(その他)



◆ 輸入 □ 輸出 ▲ 輸出-輸入

(出所) AID-XT 基礎データにもとづき編者の野田作成。

(注 1) RCA については序章の第 2 節を参照すること。

(注 2) 使用した RCA は序章で作成した 2 系列から構成される。主要 33 ヶ国を仮想世界として作成された RCA と AID-XT 基礎データのすべての報告国を合計した RCA である。序章の表 5 によれば、IMF の DOTS における報告国世界計と比較すると、前者は約 80%前後、後者は約 90%を占める。